運転者SAS検査

OCHISが結果まとめ

トラック バスとも 2割超が要精密検査

健康管理で運輸業界の事故防止を目指すNPO法人ヘルスケアネットワーク（OCHIS、理事長・武田裕大阪大学名誉教授）はこのほど、OCHISが2012年に実施した睡眠時無呼吸症候群（SAS）検査の判定結果とその分析をまとめた。それによるとトラック、バス運転者ら全受検者7493人のうち要精密検査となる「D判定」は1826人で24・4％と2割を超えた。

「D判定」の中でも特に重症者となる「D＋」は312人で全体の4・2％に達した。一方、異常なしとなる「A判定」は1092人で同14・6％に過ぎず、受検者の8割以上が軽重を含んで何らかの異常を抱えていることがあらためて分かった。

この中でトラック関係者の受検者は、男性6151人、女性237人の合計6388人だった。男性の平均年齢は43・4歳、女性は39・8歳。この中で「A判定」は979人で全体の15・3％。「D判定」は1476人で同23・1％。特に「D＋」は234人、3・7％となった。

一方、バス関係者の受検者は男性931人、女性17人の合計948人。平均年齢は男性45・3歳、女性39・2歳。「A判定」は104人で全体の11・0％とトラックより低い。「D判定」は273人で28・8％。「D＋」は63人、6・6％と、トラック関係者よりも割合が高かった。

トラック、バスとも年齢が高いほど異常値が出やすくなっており、トラックの「D判定」は30歳代受検者1683人のうち261人（15・5％）、40歳代2559人のうち608人（23・8％）、50歳代446人（34・7％）、60歳代330人のうち116人（35・2％）だった。バスは30歳代223人のうち52人（23・4％）、40歳代391人のうち115人（29・4％）、50歳代188人のうち62人（33・0％）、60歳代97人のうち39人（40・2％）。

年齢別の要精密検査となる割合もトラックよりバスが高かった。

昼間の眠りなどからSASの自覚症状があるかを問う検査前の質問表で自己認識がないと答えていた人の中で「D判定」となったのは、トラック5954人のうち1377人で23・1％。バス852人のうち250人で29・3％との割合が出た。

OCHISではこのほか、検査でSASと肥満度などとの関係も検査している。SASは睡眠中に窒息状態になり、終夜にわたって脳や身体が休めていない状況から昼間の活動中に眠気をもよおしたり、集中力を欠いたりするため、無意識に一瞬の深い眠りに入り、特に運転中にこの症状が出ると重大事故を起こす可能性が極めて高くなる。

このためOCHISでは、早期のSAS検査で症状を把握し、精密検査が必要な場合に早急な対処が求められると警鐘を鳴らしている。

SAS検査判定結果（OCHIS資料より交通毎日新聞再編）

	全体人数（人）	%	トラック（人）	%	バス（人）	%
A判定	1,092	14.6	979	15.3	104	11.0
B判定	1,973	26.3	1,724	27.0	227	23.9
C判定	2,374	31.7	2,006	31.4	326	34.4
D判定	1,514	20.2	1,242	19.4	210	22.2
（D＋）	312	4.2	234	3.7	63	6.6
G判定	2	0.03	2	0.03	0	0
R判定	226	3	201	3.1	18	1.9
合　計	7,493	100.0	6,388	100.0	948	100.0

A＝異常なし　B＝身体に異常ないレベルの酸素飽和度の若干変動
C＝身体に異常のないレベルの酸素飽和度の若干変動。強い眠気の場合は精密検査
D＝要精密検査　D＋＝要精密検査、重症者　G＝その他の呼吸器疾患
R＝測定不能（測定時間が短いなど）